全国同人雑誌評

北の同人雑誌評

妹尾雄太郎

編集部より北海道・東北地域の同人雑誌の評を書いてみないかというお誘いを受けた。北海道の同人雑誌については北海道新聞紙上でこれまで書いてきたこともあるので、ある程度の状況は分かるが、東北地方のそれについては全く知らない。手元に東北地方の同人雑誌もないので、今回はとりあえず北海道に限定して書いてみたい。評というより誌の状況や作品の紹介的な傾向の強いものになる。

『**逍遥通信**』**第6号**（札幌市）。外岡秀俊は東北地震災害の現場取材を通して重く浮かんだテーマとして「賢治と啄木～『北方文化圏』の旅」を書いたが、その中で次のように書いている。外岡はかつて「北帰行」で「文藝賞」を受賞し、その後ジャーナリストとして活躍した人である。

〈啄木と賢治を、「岩手vs東京」の対立項で見るのは間違っている。二人は北海道を旅することで文学に開眼し、東北・北海道という「北方圏」の広がりで世界を見るようになった。つまり、「辺境」に育った二人が「中央」で挫折をしたのではなく、「北方圏」という独自な文化圏を自覚したことで、「中央」に対峙する独自の文学世界を造り出したのだ、と〉

「北方文化圏」という「辺境」性をバネに独自の文学世界を構築していったという指摘と読んだ。太宰治や寺山修司や井上ひさしなど東北出身の文学者にもそうした自覚があったのかもしれない。地方の独自性が均質に均されていった現在において「北方」という意識も薄まってきているのかもしれないが、存在の精神的な深層においては歴史や風土の独自性としてそこで暮らす人の血の太い水脈はいまだ流れているのだろうと思う。そこからどのように新しい水を汲み上げていくのかは地方の同人雑誌作家の課題の一つであろう。

その外岡は二〇二一年に急死した。『逍遥通信』7号はまるごと一冊が外岡の追悼号になっている。A4版四三一ページで、こんな分厚い追悼号は見たことがない。読み通すのに数日かかった。外岡の残した仕事の大きさを思うのである。

『逍遥通信』8号は**北村巌の評論「島崎藤村とその周辺」**を掲載している。藤村の文学的な足跡を、主に『若菜集』、『破戒』、『新生』、『夜明け前』が生み出されていく背景から辿っている。藤村や関わりのある人物たちとの関係に多く筆を費やしながらまとめた読み応えのある評論である。

〈没落する旧家の暗き刻印、時代の流れに抗し敗走した人々の陰影、そして名家・島崎家に流れた呪われた血の伝説。藤村の人と文学には、それらの暗き因子が色濃く反映されているように思えてならない。〉

この見方を克明に跡づけていく論の運びである。

こうした生にまつわるマイナス要因は人によって様々であろう。完全に順風満帆な生というのはありえないであろうから、人間だれしもそういう負の生の刻印を刻まれているのだと思う。それとの向き合いが文学の生まれる土壌でもあろう。その生にまつわる負の陰影には人によって濃淡があろうが、文学として考えた時、その体験を、人に読んでもらうに足る作品に昇華できるかどうかは当然、表現にまつわる技術の問題がある。フーテンの寅の歌に、「どぶに落ちても根のあるやつは、いつかは蓮の花と咲く」というのがあるが、その自己が抱える「どぶ」の泥の濃淡以上に、その「どぶ」に根を下ろし、蓮の花として咲かせる技術が問われる。その「どぶ」から花を咲かせるという場合における方法、立ち位置の問題はある。藤村の場合、その濃い濃度の「どぶ」から表現として結実させた作品の、人間としての倫理性と表現者としての純粋性の葛藤があったと言えるとは思う。

『破戒』執筆の代償のように三人の小さな我が子を生活苦の中で病死させ、やがては妻も犠牲になる。『破戒』の評価は大きく二つに分かれているが、北村はどちらにも賛同しかねるとして次のように述べる。

〈問題の核心は社会的・階級的矛盾に苛まれて生きていることを単に訴えることではなく、そこで揺れる精神を描くことにある。いつも人間の心は揺れている。強弱、狡猾、正邪、善悪、悲哀、慈愛などの振幅を繰り返し、かつそれらが重層的に混ざって存在しているのが人間なのである。その人間のメンタリティーを捉え描いていくのが文学である。〉

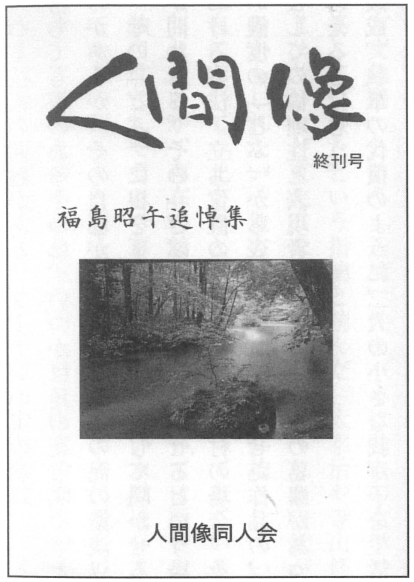
作家の実生活と発表された作品との関係を考えさせられるのが姪のこま子と藤村が関係を持ち、こま子が妊娠してしまい、藤村はそのこま子を置き去りにして自分はパリに

逃げ、こま子は出産するも、一目その我が子を見ただけで引き剥がされ、その子は他家にもらわれていったというような実生活上の出来事である。この顛末を藤村は『新生』という作品として発表する。この作品も賛否両論に割れる。北村はこの作品に藤村の「狡猾」を読み取り、「批判すべき核心は岸本（藤村）が自己告白と言いつつ、自分を装い、繕っていることではないだろうか」と述べ、その作品が社会から批判されることを想定して、その作品は「用意周到に予防線を張りめぐらしているのである」として批判的に論述しており、共感する。

藤村はこま子との関係の告白体小説『新生』によって作家的な成功を収めていくのだが、踏み台にされたその後のこま子の波乱の人生には驚愕する。そこは省略するが、興味深いのは、こま子の後年の手記の分析である。北村は、こま子が藤村に対する怒りを表明しつつ、一方で「心の奥底においてどこか藤村を慕っていた部分もあり、その愛憎の揺れのなかにこま子もいたように思う」とし、「人間の深層に宿す心理は多面体である」と述べる。先の『破戒』の評価についての引用部分も重ねて、北村の文学観であろうと共感しつつ読んだ。こま子の人生そのものが一つの小説作品であるかのように響く。

この誌は澤田展人のほぼ年刊の個人誌である。エッセー、詩、短歌、小説、評論など総合文芸同人雑誌のような作りで、いま北海道で一番勢いのある誌の一つである。広く一般に作品発表の門戸を拡げ（一定の掲載基準はあるだろうが）、発行費用は読者のカンパでまかなうという運営方法をとっており、澤田の人望もあり、それでペイしているようである。新たな一つの誌のありようとして注目したい。後述するように、次々同人雑誌が終刊していく状況だが、それは書き手の発表の場がなくなることを意味し、意欲と才能のある書き手の発表の場を提供するという意味でもとても貴重な試みであると思う。

『人間像』（北広島市）は一九四九年創刊の道内老舗同人雑誌であったが、編集・代表者の福島昭午の死去に伴い、190号とそれに続く追悼号で二〇二二年にその幕を閉じた。



泊原発の反対闘争を描いた福島昭午の「ヘラクレスは来なかった」は代表作の一つであろう。軽妙洒脱な蘊蓄エッセイは光彩を放っていた。

『コブタン』（札幌市）は一九七七年創刊で編集人は須貝光夫であったが二〇二三年に50号を区切りに終刊した。近年は須田茂「近代アイヌ文学史稿」の連載を核にコンスタントに発行されていたが、残念である。

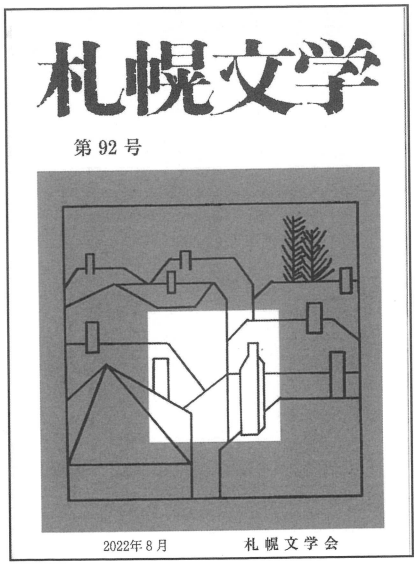
『文学岩見沢』は一九六九年創刊の誌であるが、創刊五〇年、100号の発行を以って終刊となった。代表の堀利幸や事務局の献身的な働きで続いてきた、多ジャンルの作品を掲載する地域に根を張った文芸誌という趣の誌であったが、残念ながら終刊を迎えた。

『留萌文学』（留萌市）は一九五六年創刊の歴史ある誌で、社会的な問題意識の強い傾向を持っているという印象の強い誌であったが、編集、代表をつとめた湯田克衛の高齢による体調不良で、次号の108号を以って終刊とするしかないという私信が届いた。湯田克衛には『砂は砂でなく』という戦中・戦後の留萌を舞台にした短編作品集が強い印象として刻まれている。

『札幌文学』もまた、一九五〇年創刊で、多くの書き手を輩出した道内老舗同人雑誌である。近年、代表、編集を務めていた田中和夫の訃報が先日届いた。一緒に市民文芸誌の作品選考も務めさせてもらった。この誌は後継の編集者も経験豊かな方であり、意欲的な書き手もいっぱいいるようで、希望を感じさせる。

同人雑誌の終刊は、そこに所属していた同人の発表の場が失われることでもある。その発表の場の可能性の一つとして市民文芸誌も思い浮かぶ。『さっぽろ市民文芸』39号の奨励賞を受賞した万房一己「犬のいる部屋」は抗癌病室の人間模様を諧謔的な筆致で描いて衝（笑？）撃的なとてもユニークな、才を感じさせる作品である。

函館や室蘭など、他地域の活きのいい同人雑誌にも注目しているが、東北地域の誌も含め、おいおい、取り上げることが出来たらと思う。



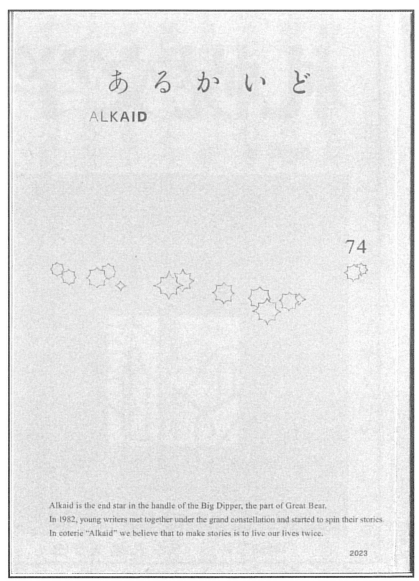
全国同人雑誌評

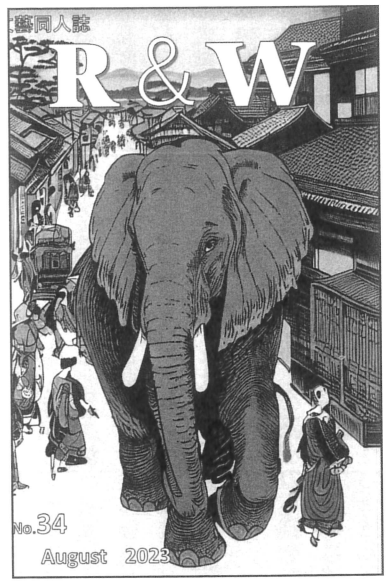
●**「あるかいど」（滋賀県）74号**

「あるかいど」は世代交代が進んだのか、以前の地道な作風から瀟洒な垢抜けした雰囲気が目立つようになっている。その中で特にその色が強く抽象的な作風が成功しているように見えたのは**渡谷邦**氏の**「水路」**である。水路に自分と似た女がいる、と言われたことから、物語は滑り出し、その女性のところを訪れるにまで発展する。その女性は自分と反対に、夫婦仲が悪く、危うい生活に追い詰められている。夫から逃げるために一時主人公の「わたし」の家に避難する形で同居する。しかし、結局出ていき、水路に水死体となって浮かぶ。日常の抽象性に徹底したところがよく、幸福な生活の底に見える危うさが浮き彫りになる。最後にもうひと工夫あって反転させるような仕掛けがあれば、恐怖を呼んでさらに深淵を覗かせてくれたかもしれないが、ここまでででも、奇妙な読後感は残る。不思議な象徴性を宿している。優秀作としたい。この誌には力のある書き手が揃っている。

●**「R&W」（愛知県）34号**

名古屋の前衛同人雑誌「何度でも何度でも新しい前衛小説アンソロジーのために」を取り上げたことはあるが、この「R&W」はまた別な姿での新鋭同人雑誌で、若い人たちの文章が躍動している。あまり構えずに、書くことを楽しんでいて、その奔放な翼の羽ばたきが気持ちいい。表紙も斬新でいかにも現代の先鋭の同人雑誌の趣がある。すでにもう34号出しているので、新鋭としてはかなり実績も積んでいることになる。主宰者の松本順子氏も「塾友」というタイトルの小説を書いているが、筆が滑らかで淀みがない。書くことそのものを楽しんでいて、それがグングン読み手を引っ張っていく。受験期の少女のアンバランスな肉体と心理がよく書かれていて、それが塾の教師の好色の牙にかかるストーリーもうまく作られている。伏線も生きていて、高度な技術もすでに備えている。ただ、題材が高校受験期の少女たちと限定的に見えるのが気になる。この少女期はある面では書きやすい。本格的な人生の苦闘はもっとあとに始まるはずなので、それにどう取り組むのか、本格的な面も見せてほしい。





「星間分子への夢――Sさんへ捧げる――」（峰原すばる）も力がある。天文学の領域を絡めた題材は珍しく、大学院を舞台に繰り広げられる男女の模様はいい旋律を奏でている。最後の唐突さも、生きている。もう少し緻密に腰を入れて文章の磨きに取り組めば、残る作品が書けるはずである。可能性を感じる書き手が、ここにはたくさんいる。

●**「みなせ」（神奈川県）99号**

「みなせ」は小野光子（ペンネーム小野友貴枝）さんが活躍していた誌で、昨年急逝されたと知って、深く哀悼の意を捧げたいが、誌そのものは健在で大いに安心した。99号に達したので、あともう一号で100号の大台に届く。頑張ってもらいたい。

中国の古い時代を扱ったものには芥川龍之介や中島敦をはじめ、おもしろいものが多いが、ここにもいい作品があった。**「薬王菩薩」（秋野成道）**は、西晋の時代の「漢儒」という人物を扱っているが、両親を早くに亡くした境遇の中で学問を愛して高官に認められ、民を愛して良政を施し、見舞われた旱魃の災害から救うために自らを天に捧げて雨を呼ぶ物語は美しい。これにもう少し文芸としての脚色を加えれば、芥川、中島の作品に追随するものにもなりそうな作品である。推薦作。

「みなせ」は全体としていいエッセイも多く、自分たちの経験や考えをストレートに出していて、その伸びやかさが同人雑誌の醍醐味を味わわせてくれる。時に正鵠を得ている重要性も孕んでいる。

盛丘由樹年氏の**「雑事記（47）」**は、もともと神奈川県の戦争遺跡を探訪してその記録を残しているものだが、その探訪そのものにも大きな意味があり、このようなことがなされていたのかと、その傷跡にも深慮にも驚かされることが少なくない。貴重な記録である。それに加えて、現代の様相を的確に捉えていて、その冷静な鋭さに、肺腑を洗われる気がする。「現代生活においては、金のかかるものが、きりがなく並ぶ」「収入がいくらあっても足りない。個人によって支払うものが異なるにしても、だれでもトータルすればかなりの高額になることに注目したい」「文明

全国同人雑誌振興会

の発達とともに、『人間らしい生活』をするためのコストがますます高くなっている」「そのコストに見合う分だけ、人は収入がなければならない」「ついていけなければ山奥で自給自足の生活をするか、都会の公園で、ブルーシートのテント生活をするしかない」「世界経済は『地球が破綻するまで』加速して走っているところがある」「経済にブレーキをかけるような政策はとれない」「アクセルを踏みっぱなしだ。政府財政破産への道を突き進む」「ヒトは文明を高度に発達させ、豊かな暮らしをするようになったのに、人口を減らしているのだから、不思議だ」「自ら『多く生まない』選択をしている。これは、子孫繁栄を目指す生物の原則から外れていることだろう」

これらの言葉と指摘は、見事に現在の我々の本質を突いている。一見当たり前だが、よく考えてみると確かに滅びへ向かっているヒトの群れの姿がある。こういう見方と指摘こそが、真の道を示している。マスコミにも表れないこういう言葉が、光を放っていることに、注目したい。

●**「果樹園」41号（愛知県）**

巻頭の**「破天荒の男」（津之谷季（つのやみのり））**は、やはりおもしろい中国の古い時代を素材にした好篇になっている。もともと隋の時代から始まった科挙という厳しい試験を題材にしている話は多いが、白蛇の化身らしき出自を取り入れて、その出世から挫折、やがて反乱の一味となっていく過程は、起伏豊かに描かれていて、充実している。たまたま先の「薬王菩薩」とともに、一つの集まりとして編集してみたいだけの内容を有している。推薦作としたい。

この誌は時代へのロマンのようなものが匂っていて、それが大きな魅力になっている。「二百名城気まま歩き3」（小林眞理子）も松代城、上田城、大阪城、興国寺城、古

宮城、苗木城など、丹念に歩いていて、よくこれだけの城を訪ねるものだ、とその情熱に驚かされる。同人誌でないと現れてこないこうしたパッションを大事にして続けてもらいたい。

●**「北斗」（愛知県）700号**

第一回の同人雑誌大賞に輝いた「北斗」もついに700号に達した。心から祝意を表したい。今号は一七二Pの豊かな号になったが、主宰の**竹中忍**氏の**「主張を持った雑誌として」**は、同人雑誌の一つの貫きを強く示していて、気骨と筋を感じる。「もう一つの特徴は反骨精神た。木全圓壽は芥川賞を断り、清水信は近代文学賞を受けても鈴鹿に居を定めて三重の文芸振興に努めたように反中央、反権威、反アカデミズムが一貫する」「同人雑誌の雑の字も大切にする」と旗印を再確認しながら、持続の骨格となった支柱

を再び磨き上げている意志に輝きがある。全ての同人雑誌に伝えたい、同人雑誌精神の拠り所がある。八〇〇号、千号わ目指してほしい。

また同氏の**「笑劇／私の地獄落ち（一幕三場）」**も痛烈に現代への皮肉を投じていて、氏の真骨頂を示している。

●**「雑記囃子」（大阪府）28号**

「派遣社員」（堀康司）は、よく現代の派遣社員の立場を描き出している。正規雇用はどんどん少なくし、企業は使い捨ての安い便利素材として、派遣社員を利用する傾向が高まっている。その実態はかなり描き出しているが、もう一つ肉声を宿した部分が欲しい。文章による掘削力をもっと鋭くして、心理の底を這うような感情を拾い上げるともっと濃密な作品になったと想われる。題材がいいので惜しまれる。

今季をまとめる。

優秀作

「水路」渡谷邦　「あるかいど」74号

推薦作

「薬王菩薩」（秋野成道）「みなせ」99号

「破天荒の男」（津之谷季（つのやみのり））「果樹園」41号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）